



第1回 基礎講座

なぜ子供に芸術文化体験が必要なのか？

～アーティスト・ワークショップを通じて社会課題と向き合う～

堤 康彦氏 NPO 法人 芸術家と子どもたち 代表

大学卒業後、10年間民間企業に勤務。退社後、大阪府立大型児童館等を経て、99年より独立。現代芸術家を小学校等へ派遣しワークショップ型授業を実践する活動「ASIAS(エイジアス)」をスタート。学校教育や児童福祉等の分野で子どもと芸術家をつなぐ事業を展開する。著書に、「子どもたちの想像力を育む アート教育の思想と実践」(共著/佐藤学・今井康雄編)、「子どもたちのコミュニケーションを育てる」(共著/秋田喜代美編)他。

第1回のテーマは「なぜ子供に芸術文化体験が必要なのか?」。子供向け事業を企画・実現するコーディネーターの視点から、芸術文化体験が子供にとってどのような意義を持つのかを掘り下げました。

講師には、1999年に設立された子供向けワークショップ専門のコーディネート団体「NPO法人 芸術家と子どもたち」代表の堤康彦さんをお迎えしました。四半世紀を超える活動で培われた経験をもとに、子供向け事業をコーディネートする意義やワークショップがもたらす効果、コーディネーターに必要な資質についてお話をいただきました。

■子供向け事業の2つの目的と、ワークショップのつくり方

はじめに、子供向け事業を企画する目的を「芸術文化振興型」と「社会課題解決型」の2つに分けて考えることが示されました。前者は芸術文化そのものの振興を目指す活動であるのに対し、後者は個々の子供やその環境が抱える社会課題を解決するための手段として芸術文化を用いるものです。「芸術家と子どもたち」はこの社会課題解決型に軸足を置いているとのことでした。

「芸術家と子どもたち」では、「ASIAS(エイジアス)」と「PKT



(パフォーマンススキップ・トーキョー)」という二つの事業を活動の柱としています。どちらも、アーティストとの出会いを通じて子供の潜在能力を引き出すとともに、アーティストにとっても新しい表現を探る機会となっています。

実際にワークショップにおけるコーディネーターの具体的な役割についても紹介がありました。「芸術家と子どもたち」では、まず施設へのヒアリングを行い、その内容をもとにアーティストを選定します。その後、アーティストと教師や施設の職員との事前打合せを経て、ワークショップを実施、実施後には振り返りの機会を設けています。既製のプログラムを持ち込むのではなく、施設ごとに内容を相談し手づくりしていく背景には、「場所によって子供たちの状況が異なるため、現場の先生たちの思いも尊重したい」という考えがあります。事前・事後の対話を重ねながら、それぞれの現場に応じたプログラムづくりを大切にしていることが印象的でした。

■子供を取り巻く社会状況と、ワークショップの役割

学校にアーティストが赴く「ASIAS」を行う意義について、堤さんは「学校が子供のダイナミックな成長の場であること」や「様々な家庭環境の子供が集まっていること」「教員や親だけでは解決できない問題があること」などを挙げました。

子供を取り巻く社会状況の変化についても言及し、自然のなかで遊ぶ機会が減少する一方で、インターネットやスマートフォンに触れる時間の拡大、親や先生以外の大人と接する機会の減少、教育格差や体験格差の広がりに加え、通常学級でも発達障害の可能性がある子供の割合の増加などから、個々の子供への支援や対応の必要性が増しているという近年の傾向を話しました。

そのような状況のなかで、アーティスト・ワークショップは既存のルールに縛られない表現の場であり、発達障害のある子供が中心的な役割を担ったり、普段とは違う集中力を発揮したりする機会にもなっているという気づきがあったと言います。また、虐待を受けた経験のある子供の場合、アーティストが表現を肯定的に受け止め続けることで、他者との関わり方や自分自身への信頼を育む土台になり得るなど、多様な背景を持つ子供にとって、アーティストによるワークショップが果たし得る役割についても述べられました。

堤さんは25年間の活動を経て「アーティスト・ワークショップは単なる文化体験ではなく、もっと大事で根本的なことを提供しているのではないか」と考えるようになって

たと語ります。一方で、その重要性が大人たちに十分共有されていないことを指摘し、今後さらに活動を広げていきたいという思いが語られました。

受講生からは、「多様な背景を持つ子供たちと接する機会があるため、社会や環境の変化を意識したプログラムを実施していきたいです」といった感想が寄せられました。

■コーディネーターとして必要な資質とは？

堤さんはコーディネーターとして必要な資質の一つとして「アートの専門家でありつつも、アートから距離を置くような広い視点」を挙げました。福祉や教育など、芸術文化以外の領域にも興味を持ち、様々な人と関わることで、表面には現れにくい子供の内面を想像できるようになることが重要だと指摘しています。

また、行政的な縦割りの考え・役割に縛られないことや、多様性やコミュニケーション、価値創造といった芸術文化ならではの強みを生かすこと、さらには子供にとっての心の拠り所となる役割を担うことにも言及。その上で、「世の中の周縁にこそ目を向け、社会も自分自身も変わり続けていくという意識を持つ大切さ」について話されました。

受講生からは「ワークショップそのものを目的とするのではなく、子どもたちの育ちや社会とのつながりにどのように寄与できるかという視点を、これからの実践の中でも持ち続けていきたいです」といった感想も聞かれました。

■最後に

堤さんはアートやアーティストが社会に果たす役割について「自分たちが良いと考える芸術文化を社会に一方的に押し付けるのではなく、社会の動きや子供たちの様子に敏感になって、『我々だったらどんなことができるのかな』とつねに考えること」だと語りました。その言葉からは、社会と向き合いながら活動を継続するコーディネーターの姿勢の大切さが伝わってきました。



■質疑応答

約1時間の講義が終わり、質疑応答を行いました。受講生からは資金やコーディネーターの育成など、具体的な活動を見据えた質問も多く投げかけられました。

Q. 活動を始めた当初は財源が少なかったと思いますが、企業からの支援はどのように得ていったのでしょうか？

A. 最初は知人からの紹介などにより企業の社会貢献部門とつながり、支援をお願いしました。支援をお願いするときも相手のことをよく調べて見せ方を考えることが大切で、その企業がどんな考え方でCSRに取り組んでいるのか調べたり、企業の関心に近い活動をアピールしたりしています。

Q. 「芸術家と子どもたち」は少年院でも活動されていますが、少年院とのつながりはどのようなきっかけで得たのでしょうか？

A. スタッフの1人が「アーティストとのワークショップを少年院にも届けたい」という思いを持ったことがきっかけです。アーツカウンシル東京の助成でヒアリングなどのリサーチを行い、その後ベネッセこども基金や赤い羽根福祉基金などの助成を得て実施を継続しています。助成事業として採択された以上は、ワークショップができるか不確実な状況でも必ず実現させる覚悟が必要で、愚直に現場を運営して効果を出し続けることが、資金を出す側との信頼関係につながると考えています。

Q. ワークショップを通じて得られる力を説明する際、自己肯定感や想像力の向上などの数字で測りにくいものをどう評価し、伝えていけばよいのでしょうか？

A. ワークショップの効果はテストの点数のように定量的には測れないので、定性的な評価を積み上げていくしかないと思っています。子供の目の輝きや、普段関わらない子供同士が関わる様子、引っ込み思案の子が人前で堂々と踊る姿など、ワークショップのなかで起きた変化を、文字の記録や写真、映像で残すようにしています。また、当事者の子供や、先生、アーティストなど関係者へアンケートをとったり、振り返りのときの発言を記録に残したりしています。

Q. ワークショップ後の振り返りは具体的にどのように行っていますか？

A. 振り返りでは「普段はどんな子か、今日はどんな反応をし

ていたか」を先生と話し合いながら、1人ひとりの変化を積み上げていきます。同じ場面を見ていても、先生とアーティストとコーディネーターとで捉え方が違うことがあり、先生が「逸脱」だと感じた行動でも、アーティストの視点で「個性」と捉え直すなど、視点の違いに気づいて共有し合うことも大切にしています。

Q. 学校や施設から依頼があった際、アーティストやコーディネーターはどのように選ぶのでしょうか？

A. アーティストの選定は、事務局のコーディネーター全員で集まり、学校や施設との事前打合せ内容を共有しながら相談して決めています。先生とアーティストの相性も重要なので、ある程度相性が合いそうで、先生のイメージよりさらに半歩先に連れて行けるワークを展開してくれそうなアーティストを選ぶのも、コーディネーターが工夫するべき部分だと思います。アーティストのリサーチは基本的に舞台や展覧会、ワークショップに足を運ぶ形で行っています。また、過去のワークショップでアシスタントを務めた若いアーティストにお声がけすることもあります。そして、コーディネーターにも経験の有無や得意不得意があるので、担当する現場やアーティストとの組み合わせにも気を使います。団体としてコーディネーターを育てていきたいので、経験のあるメンバーと新人スタッフが同じ現場に入り、話し合いながら学んでもらっています。

